

ウィルソン株

この空洞のある窪んだ切り株は、16 世紀に伐採されたスギの巨木の残骸である。伐採時の樹齢は 2,000 年から 3,000 年と推定されている。切り株の外周は 13.8 メートル、内側は 16 平方メートルで、だいたい小さなホテルの一室ほどの大きさである。屋久島最古の切り株と考えられている。

一説によると、この木は、徳川幕府（1603-1868）成立以前に中央集権化を推進した 3 人の武将のうちの 1 人である豊臣秀吉（1536-1598）の命令で伐採されたという。秀吉は九州地方での戦いで、屋久島を支配していた島津氏を征服した。秀吉は、征服した各地域の木材を使って、奈良の東大寺に匹敵するような新しい大仏殿を京都に建てることを決めた。建設工事は 1588 年に始まったが、記録によると、島津家の重臣が秀吉に代わって屋久島を訪れ、使用可能な木材の調査を行ったという。代々、奥岳の大杉は神聖視され、伐採されることなく残されていたが、耐久性に優れ、樹脂分を多く含む良質の木材は、秀吉の目的にうってつけであった。

イギリスの植物学者アーネスト・ヘンリー・ウィルソン博士（1876-1930）が 1914 年にこの大株に出会うまで、この大株についてはほとんど知られていなかった。ウィルソンはハーバード大学のアーノルド樹物園の探検隊で、屋久島の植物のサンプルを集め、森林の写真を撮っていた。彼の写真の 1 枚にこの切り株の巨大なサイズが、探検隊のメンバーとの比較でわかるように映っていた。ウィルソンは 1916 年に『The Conifers and Taxads of Japan』（日本の針葉樹と分類群）を出版し、屋久島の森と、彼の名を冠した驚くべき切り株に世界中の注目を集めた。

ウィルソン株の中には泉と木魂（たましろ）神社と呼ばれる小さな祠がある。祠はウィルソン株に宿る

神を含めて 3 体の神を祀っている。切り株の外側は苔と数多くの着生植物（他の植物の上に生える植物）に覆われており、その中にはヒメシャラ、サクラツツジ、イヌガシと呼ばれる月桂樹の一種などが含まれる。周囲には、ウィルソン株の木が切り倒される前に落とした種から成長したと思われる若い杉が 3 本生えている。

かつては、ウィルソン株やその周辺には、より多くの種類の着生植物やその他の低木が生息していたが、ハイカーの激しい往来によってそのほとんどが枯れてしまった。この一帯は再生途上であるため、ハイカーは休憩所と切り株の間に続く道をはみ出ないようにすることを求められる。切り株の中に入るとは許可されているが、切り株に登ったり、切り株を囲む下草の中に入ったりしないように。

ウィルソン株からは、大株歩道が西の縄文杉方面（1.9 キロ、約 1 時間 30 分）や、さらに先の宮之浦歩道や宮之浦岳（7.5 キロ、約 7 時間）の方面へと続く。東に向かうと荒川登山口（8.7km、約 3 時間）へと至る。

最も近い水洗トイレは大株歩道登山口（0.6km、東へ約 25 分）にある。大王杉付近（1.1km、約 1 時間）には常設の携帯トイレブースがあり、3 月から 11 月まではテント式の携帯トイレブースも設置される。